

次の課題文を読み、設問に答えなさい。

それではいったい「共存」といい、あるいは「共生」というのはどういうことなのでしょう。まえに人間が他の生物と「共生」していることは申しあげました。庭の草花も、そこにくる小鳥も、みんないつしよに同時的世界を生きている仲間です。しかし、他種の生物との共生と人間どうしの共生はだいぶ様子がちがいます。庭にでて花や小鳥といつしよに生きてるのはたのしいことですが、垣根ひとつへだてた隣人がことばのつうじない外人であつたら、なんとなく緊張します。こればかりはしかたがない。

つまり「多文化共生」というのは、ことばのうえではうるわしいものですが、現実にはなかなかむずかしい。たとえば宗教です。われわれ日本人はおおむね仏教徒だということになっています。まあ、相当にいいかげんなところがあつて、ふだんはそんなに戒律など気にしてはおりませんが、そういう信仰を精神的環境として生きているわれわれにとってイスラム世界はまったく異質です。世界を知るためにもっとイスラム世界のことを理解しなければならぬ、という理念はまちがっていません。しかし、イスラム圏のなかにはいつてわれわれが心やすらかに暮らすことはむずかしい。ジャカルタなどでも朝はやくにモスクから拡声器で流れてくるコーランの声に、いささかの異国趣味を感じることもあつても、ひとびとの敬虔な精神世界のなかにとけ込んでゆくのは困難です。

イスラムという精神圏にくらべると、アメリカ的民主主義という精神圏はいくらかわかりやすいようですが、あれもじつはわたしたちには異質です。たしかに日本はアメリカからおおくのことを学んできました。しかし、だからといつてアメリカ的な価値を全面的に理解するといふことはできません。ましてやそれを身につけることなんかできた相談じゃありません。相手がアメリカだからおたがい理解できる、というのもしささか安易な認識であるようにみえます。わたしたちにとつて、イスラムがわからないとおなじようにアメリカもわからないのです。どつちに馴染んでいるか、といえればそれはアメリカでしょうが、わからない、という点ではおなじようなものなんじゃないでしょうか。

たしかに、いまの世界ではアメリカ的価値がいい、ということになっていきますし、アメリカの価値が世界の価値だとかんがえているひともいるかもしれない。でも、それはまちがいです。ましてや、アメリカ的生活様式こそが「グローバル」だ、などというのはいへんな錯覚とすべきでしょう。「グローバリゼーション」とは「アメリカ化」のことだ、とか「グローバル言語」は英語だとかいった思想にわたしは同意できません。

こうしたさまざまな異質なものとの「共生」はなかなかむずかしい。その理念からすると、さまざまな人種、民族がおたがいがうことをみとめながら、いっしょに溶けあつて生きていきたいと思いますというものが「共生の思想」というものでしょう。それはかつてのアメリカが理想としていたものに似ているかもしれませんが。多民族国家がその内部にある多様な宗教や信念、思考をそれぞれに尊重しながら融合的に共存していきましようというわけです。

しかし、これは理想としては文句のつけようのない立派なことであっても、現実には実現不可能な夢であります。だいいち、多言語国家だ、といつても結局のところ公文書から日常会話にいたるまで英語がアメリカの「国語」になっているじゃありませんか。宗教の自由もアメリカ民主主義の原則ですけど、それではアメリカの裁判所で証人台にたつとき、なぜ仏教徒たるわたしたちまでもがキリスト教の聖書に手を置いて宣誓することをとめられるのでしょうか。結局のところ、英語、アングロ・サクソン民族、キリスト教、という三点セットが「多文化」のなかで圧倒的な支配力をもっている、ということになるのです。

つまり「共生」とはいうものの、さまざまな文化のなかで、強いグループと弱い方のグループができあがつて、おたがいにその位置を認知しあうというのが多文化社会アメリカの現状なのであります。

〔中略〕

さきほどから、わたしはしばしば現代世界でのアメリカについてふれてまいりましたが、アメリカ的民主主義というのときには原理主義になる可能性をもっているようです。はやいはいはなし、アメリカ的な議会制民主主義というのは世界でいちばんいい制度だ、という思想もそうかもしれません。たしかに、人類が経験してきたいろんな政治形態のなかで、アメリカ式民主主義がかなりよさそうだ、ということはわかります。しかし、だからといって、多様な社会的発展をしてきたさまざまな民族や国家に

アメリカの真似をしろ、というのもおかしな話です。ましてやアメリカ式の論理がつうじない社会を「非民主的」だ、などと
いつて糾弾するのはまことよろしくない。わたしはアメリカとこれまで半世紀にわたってつきあってきましたが、いまの
〔ジョージ・W〕ブッシュ政権下のアメリカにはそういう危険があるようにわたしにはみえてしかたがありません。アメリカ民主
主義だけがただしい、というのなら、それは「アメリカ原理主義」というものです。これで世界を判断されたらこまります。

わたしはこのアメリカ原理主義というのをいささか気にしています。それというのもこの原理主義と「グローバリズム」という
観念がどこかでむすびついているようにおもわれるからです。べつなことばで申しますと、世の中には「グローバリズム」すなわ
ち「アメリカニズム」とカランチがいらしているかたがすくなくないようなのであります。

はじめから申しあげてきているように、現代世界は「グローバル」な視野でものごとをみなければならぬ時代であります。な
にしろ日本の現在をかんがえてみるだけでも食品からテレビ番組にいたるまで輸入品ばかり。それに世界各地からたくさんの方
外人が日本に定住しはじめているのですから、わたしたちの身边、ことごとく「グローバル」なのです。このことは否定もできま
せんし、事態は不可逆的というべきでしょう。

こんなふうに「グローバル」になったことは事実ですが、そのことは、かならずしも「グローバル・スタンダード」という「標準」
やモノサシがあるということの意味するものではありません。ましてやその「標準」がアメリカだ、などという議論があるとした
ら、それはおおきなまちがいです。ひとつのことがらも、それをどう解釈し、どう対応するかはあくまでも相対的なのです。か
ら、いくつものモノサシでかんがえなければなりません。すべてはひとつのモノサシで判断できる、という独善的な立場をとる
と、たいへんなことになってしまいます。

〔中略〕

でも、こういう原理主義はあんまりいいものではありません。それが十字軍思想であれ、イスラムであれ、あるいはアメリカ
式民主主義であれ、とにかくモノサシ一本、というのは、たいへんに迷惑なことです。ものごとに明快にケリをつける道具とし
て原理主義は便利ですけど、この道具は歴史的に、しばしば悲惨な誤解や戦争をする口実にもなってきました。多文化共生と

いものなら、モノサシをたくさん用意して、いろんな評価や判断を共存させなければなりません。

なんべんも申しあげるようですが、複数のモノサシが共存する社会というのは、あんまりたのしいものじゃありません。たとえていえば、ヤード・ポンド法、メートル法、尺貫法、などいくつものモノサシの存在をつねに意識し、そのいずれをも絶対化せずにいる、というのはかなりの苦勞なのであります。でもその苦勞なしに多文化共生は不可能です。いや、こういう苦勞をすることが「共生」ということなんでしょう。

〔中略〕

このような複数の尺度の同時的共存のことを、わたしはかりに「ごちゃごちゃ主義」ということはで呼んでおくことにします。べつだん学問用語として公認されているわけではありません。しいていえば、これは「原理主義」の対極にあるものとしてわたしが勝手にかんがえたものであるにすぎません。その核心は、要するに世の中、ごちゃごちゃでいいじゃないか、ということにあります。もつとはつきりいうなら、ごちゃごちゃ以外に人類の生き方はない、というのがわたしのかんがえなのです。

ごちゃごちゃしていれば、かならず問題が発生し、矛盾がみつかり、どこかで破綻がおきる。こればかりはしかたがない。でも、そういうときには、その場の知恵でどうにか弥縫（ひほう）策をとっておく。いわば、穴があいたら、とりあえずそこをふさいでおきましょう、という思想です。またべつなところに穴があけば、そのときはそのときでかんがえる。こういう思考の方法は「つぎはぎ主義」^{*}ないしは「ピースミール方式」といった名前でもいいでしょう。あるいは「ゆきあたりばったり方式」。

原理主義というのは十字軍のように、まことに勇ましい。それにたいして「ごちゃごちゃ主義」はまことにたよりないものです。だいたい、これを「主義」というにはあまりにも無原則、無責任です。でも、それでいいんじゃないか、それ以外に方法はなんでしょう、とわたしはおもっているのです。

ちよつとはなしがおおげさになりますが『莊子』のなかにでてくる「渾沌」の物語を思い出してください。渾沌というのはのつぺらぼうの偉大な存在です。いったいどんなすがたなのか、だれにもわからない。その渾沌があるとき訪問してきたふたりの王様を手あつくもてなした。さあ、これではかわいそうだ、お礼のシルシにというので、よせばいいのにふたりの王様が目、鼻、口

などをくつつけて一人前のかたちあるものにしてやろう、としたら、そのとたんに渾沌は死んでしまいました。目や鼻をくつつけよう、というのは「主義」です。渾沌は「主義」以前の状態です。ごちゃごちゃはごちゃごちゃである。無茶なようですが、その認識だけでいいではありませんか。

ありがたいことに、こういうごちゃごちゃ状態のなかに生きることについて日本人はなかなかいいところまでやってきた、とわたしはかんがえています。なぜなら、わたしたちはいろんなものがごちゃごちゃしていることにあんまり頓着しないからです。

(出典 加藤秀俊『多文化共生のジレンマ グローバリゼーションのなかの日本』明石書店、二〇〇四年)より)

* piecemeal : ぽいぽいの、断片的な

問 課題文の内容をふまえて、日本の文化の「ごちゃごちゃ状態」についてのあなたの考えを六〇〇字以内で述べなさい。